

吉野川河口の干潟

Yoshinogawa Estuary

とくしま自然観察の会 <http://www.shiomaneki.net/>
 (連絡先) 〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町4-70-3-301 Tel & Fax.088-623-6783
 ※この環境マップは2002年度のPRO NATURAファンドによる助成金によって作成されました

吉野川の河口。そこに広がる水と空と干潟。

淡水と海水が交わり、川、海、陸、空の生き物が群がり、人が集う場所。この場所で生命は生まれ、人もまた育まれる。悠々とした川の流れる、時間の流れをゆったりと濃密にして、私たちは河口に広がる豊穡さを実感する。その豊穡さが実感できなくなったとき、生き物の姿が昔話になったとき、私たちは、子どもたちに対してどのように言い訳すればよいのだろうか。心と物の本当の「豊かさ」について目を開く時代(とき)ではないだろうか。

【吉野川河口干潟を楽しむための生き物カレンダーです】



吉野川と紀伊水道が出会うところにある河口干潟は、川と海と陸の個性が混ざり合って独特の空間をつくっています。ですから、この干潟はとて不安定だけれどエネルギーに満ちていて、とてもダイナミックでユニークな生態系を生みだしています。ここに生息する様々な生き物の活動を観察するだけでも興味は尽きません。

吉野川の干潟は1年中楽しめるよ



子どもたちの心の故郷

私は結婚して二人の子供を沖洲で育てました。昭和40年代は、沖洲は素晴らしい砂浜が残っており、子どもたちは思う存分に泳ぎ回り、マテガイをとって遊びました。子どもたちの心の故郷といっても過言ではないでしょう。その後、水鳥の楽園であったイナ池(現在の中央卸売市場)が埋め立てられ、沖洲海岸が埋め立てられてマリニピアとなり、そして今、最後に残された吉野川河口の自然が架橋工事によって大きく傷つけられようとしています。私たちはかけがえない自然を今失おうとしています。行政も市民も今一度、環境問題について考え直して欲しいと思います。(M.S.さん)

この心が解放される広がりをお子たちに残しておきたい

自転車で土手を登ると干潟が目に見えてくる。ヨシ原を渡る風、カニたちのざわめき、鳥の姿。自転車で土手を走る。干潟の向こうは川と海と空がひとつに溶け合うところ...この心が解放される広がりを子どもたちに残しておきたい。(N.Y.さん)

子どもたちと河口干潟の探検に出かけた。広い豊かな水の流れ、ゆたうと行き交う漁船。川は海とつながり、そして空とつながる。無限の広がり。ヨシ原のそばの赤い大きなササミの不思議なシオマネキ。せせとエサを食べている。ちやうど人がカニとすばやく穴に潜る。あわてたカニは大きなササミをうまく穴に隠すこととができない。子どもたちは、すっきりと、とりになつてしまった。時間でも2時間でも、泥干潟でたわむれる。とても気持ちがいい。楽しい。子どもたちも、たまごの歌。こんなに素敵な干潟を、子どもたちのままに残したい。(T.T.さん)

身近な場所に生き物の楽園がある

吉野川河口干潟にあんなに沢山の生き物が棲んでいることは驚きでもあり、感激ものです。私たち人間が暮らしている市街地の身近な場所に生き物の楽園があることを一人でも多くの人に知って欲しいその楽園の行く末を注視してください。(A.H.さん)

ここで深呼吸をひとつ
 呼吸する干潟が好き。ここで深呼吸をひとつ。わたしの呼吸と、吉野川河口干潟の呼吸が重なる瞬間。この場所を無くしたくないと思う瞬間。(O.T.さん)

空間と風の空間
 四国三郎の名をもつ大河の河口が海と出会うところに空と風の空間が奇跡的に残っていました。生物相は、干潟の生態系の圧倒的な質を示しています。人はその空間を失って初めてその価値に気づくでしょう。今まで来ていた鳥が訪れなくなり、ある生き物たちは棲まなくなつていくでしょう。鉛筆をなめた架橋の環境影響調査(十分評価)されぬまま、その空間が消え(さび)ていくのが怖くありません。(S.S.さん)

そのままあってほしい

干潟とは新しい命が生まれ、そして多種多様な命があふれているところ。脈々と息づいてきた命の営みを、人が川を分断することで、途切らせてはいけません。吉野川の流れと干潟の生き物の脈は、永遠にそのままあってほしいものです。(T.M.さん)

干潟メッセージ

吉野川河口干潟の何が凄いのか、私たちは何を大切に思ってきたのか、吉野川の干潟の真上をとる大橋の建設によって、私たちは何を失おうとしているのか、とくしま自然観察の会のメンバーのなかでも、特に吉野川の干潟に足繁く通い、干潟に思いを抱いている人たちから、メッセージを集めました。

海まで見渡せる突き抜けた風景

干潟に降りてみてください。風、水、植物、生き物の音。たくさんのカニの生活のそけす。土手ひとつ越えたとこで、自然にどっぷりひたれる場所があります。失いたくない。次世代に残すべき財産だと思ふ。(H.M.さん)

好きな場所、そこへ行きたいと思う場所がある事は幸せだと思う

悲しい時、つらい時、さびしい時、いやされた時、うれしい時、楽しい時、あそこにある場所に行きたいと思える場所が吉野川河口です。しかし、今そこが変わってしまう!干潟の生き物にかかわってくることは、人間にかかわってくるのだと思うのです。(O.Y.さん)

スローライフのすすめ

休日サイクリングはいかがですか。ドライブ中には味わえない新たな感動に胸躍らせる時もあります。たとえば、類に当たる風の優しさ。家々の間から垣間見えるコスモス畑、小川の岸辺にたたずむカマたちの群れ、遠い山々を背景にして青い空にぼかり浮かぶ鳥たち、などなど。何かにつけスピードアップが求められるこのご時世だからこそ、あえてスローライフを心がけてみませんか。ゆっくりと余裕のあるライフスタイルの中に、きっとあなたにも新しい発見が待っているはずですよ。

先日、阿南市の福井川まで遠出してみました。コスモスが咲き乱れる堤防の向こう側で大規模な圃場整備事業の現場に出くわし、考え込んでしまいました。水田をかさ上げするため、周辺の山は削り取られ、落ちたら最後二度とはい上がることもできない三面張りのU字溝が延々と続く、そんな水田地帯に変えられているのです。しかも、これは阿南市だけでなく、巨額の税金を投じて全国規模で実施されている国策事業なのです。これだけ「種の多様性」が叫ばれている中で、メダカさ絶滅寸前まで減ってしまった圃場整備という名の「環境単純化」事業が正々堂々と続けられている現実には暗澹たる思いがしました。

私たちと共存している生物は、1種類でも多ければ多いほど全体として安定して生存できる、という「生態系」の概念から種の多様性が叫ばれているわけですが、私たちは自然を保護しているのではなく自然に保護されている、という事実を忘れてはいけません。種の多様性は環境の多様性によってのみ保証される、という事実を踏まえては、いか。地球表面は、すべて人間だけが利用するための資源、など高慢になってはいけません。古来、自然とうまくマッチしてきた水田以外にも、生命の宝庫ともいわれている湖沼や干潟などの低湿

地が、経済至上主義などによって埋め立てられ破壊し尽くされようとしています。特に、干潟には水質を浄化してくれるヨシや水草が繁茂し、そこは原生動物、環形動物、甲殻類、昆虫、魚、鳥など多くの水生生物の生息地となっているのです。地球規模で数万の。の渡りをするシギ類やチドリ類などの鳥類にとって、干潟の消滅は食料供給地を失うことにはなりません。近年におけるシギ・チドリ類の激減は、そのことを端的に示しています。

徳島市の吉野川河口干潟を訪れるシギ・チドリ類の数が比較すると、23年前の1年間に6105羽カウントされたのが、最近では3591羽しか数えられていません。四半世紀でほぼ半減してしまいました。同河口干潟がシギ・チドリ類にとって、いわば「国際空港」の役割を果たしていることは人工衛星ノアを使った電波追跡法によって確かめられています。98年1月にオーストラリア東部沿岸のモートン島で電波発信機を装着された1羽のホウロクシギが、同年3月吉野川河口干潟に姿を現したのです。その間、パプアニューギニア沖と沖大東島付近のわずか2カ所にしか舞い降りていません。同河口干潟で貝類やアナジャコ、小ガニ、ゴカイなどを採食しながら9日間滞在した後、日本海をひとまわしついでロシアのウラジオストク付近に到達したことで判明しました。

多くの渡り鳥にとつて、吉野川河口干潟がいかに大切かが科学の力で実証されたのです。しかし、これほど貴重な干潟を子孫に継承すべく、積極的な保護対策を望む声が強いにもかかわらず、残念ながら行政は重い腰をなかなか上げようとはしません。それどころか、干潟を分断するように巨大な橋の建設が進められています。もの言わぬいきもたちを犠牲にするには、いとも簡単です。でも、これは何も鳥だけに終わる問題ではありません。人間だけが独立して地球上に生存しているわけではないからです。失った後、その大切さに気づいてももう遅いのです。そんなことを思い描きながら帰路につきましたが、ペダルがいつになく重く感じられました。(Y.K.さん)

緑のヨシ原と青空が
 つながって気持ちいい
 夏ヨシ原にはたくさんの巻貝と赤いカニ。干潟に産み落とされたカニの殻も、一枚貝もたくさん採れる。川の豊かさに感じる。広い川幅に緑のヨシ原と青空が広がって気持ちいい。吉野川河口の雄大な風景。日本の川本来の姿がここにはある。今はもうほとんど見られない貴重な風景なの。(W.T.さん)